

事例の時系列的実践記録は、事実だけに学ぶことが多い

ある幼少の自閉症児の父親から、親子が日頃お世話になっている田辺教授（奈良教育大学）の著書「自閉症児の発達理解と教育－発達検査結果を教育実践に生かすために－」を送付いただき、読み終えた。

著者は、「昨今の保育・教育は、あまりにも子ども不在、子どもの要求不在のところから出発し過ぎてはいないでしょうか。子どもを理解することなく、『教える』ことだけが一人歩きしてはいないでしょうか。」と問いかけ、20数年来の障害児の「療育教室」の取り組みから、「子どもの世界を理解し、子どもの思いをしっかりと受けとめられる大人（親、教師）がいれば、きっと応えてくれる。」と、その証というべき著書は自閉症事例の長年の時系列の実践レポートと云えるものでもあった。

そこは障害児教育の研究に携わる教授の著書だけに、いわゆる学問的にも検証、整理、考察され、2才から約20年間の一人の事例の時系列的報告もあり、文献的にも価値が大きいものと推察する。

話ことばで記述されているので読み易かったが、内容が深いだけに読解するには、読む方の力量がかなり問われているなあと感じつつ、読み終えた。

また、著書の副題に「発達検査結果を教育実践に生かすために」とあるように、「発達検査結果から導き出される発達年齢や発達指数といった数量化される部分にのみ目を向けるのではなく、一つひとつの検査項目が測定しようとしている心理機能やその発達の意味についての理解を深めていくことが必要です。」と、教育実践に生かす工夫・実践についても、時系列的な記録が整理され、たくさんの図表も記載されている。

自分もいわゆる発達検査の数量的利用に疑問を持ち、重症児の療育実践に生かせるように検査項目の発達の意味を明らかにすべく、全国の仲間と1981年に「発達評価法の検討－発達評価表、発達評価の手引き－」を作成したことがあるだけに、著者の云わんとすることは十分に理解できる。

また、自分は、尊敬する大学時代の先輩の「一人の事例でもいいから、30数年の療育実践を時系列的に纏めたら。」とのアドバイスに応えることが出来なかつただけに、長年の時系列的な実践報告をされた著者に敬意を表するし、反面、羨ましくも思った。

日々障害児と係わっている方々に、実践するとはどういうことかの示唆を得ることが出来ると思うので、ご一読をお勧めします。

（2006年9月9日 記）